

資料紹介

『東京名物百人一首』清水晴風著

川本 勉

一、本書について

本書は、「玩具博士」と称された清水晴風(一八五一—一九一三)が、明治時代後期の東京の名物一〇〇件(風俗、流行、著名な商家、飲食店、芸能人など)を、享保年間に成立した狂歌絵本『道化百人一首』(江戸中期の画家、近藤清春の作・画)をまねて、『小倉百人一首』(藤原定家撰)に擬した和歌に仕立てて紹介したもの。採録された名物のほとんどには、関連する絵や商標、広告、入場券などの紙片を書き写したものが添えられている。用が済めばすぐに捨てられてしまうようなこれら紙片類は、当時を語る歴史資料として重要である。

和装(五つ目綴)、大きさ二七・〇cm×一九・二cm。序文二丁、本文五一丁。帝国図書館後補の厚表紙。元表紙題簽に「東京名物百人一首」と墨書があり、内表紙表に「東京名物百人一首」の墨書と、「晴風文庫」「晴風之印」の朱印がある。大正七年(一九一八)一月三二日購求。当館請求記号NK100。字体や筆の使い方などに晴風の特徴がよくでていて、晴風自筆と思われる。

二、著者「清水晴風」について

清水晴風は、玩具研究家として最もその名が知られている。玩具研究の著作には、郷土における伝統玩具の研究資

料として高い評価を受けている玩具画集『うなるの友』（初編・六編 山田芸艸堂 一八九一年・一九一三年刊 当館請求記号 YDM72155）を始め、『諸国羽子板』（たるまや書店 一九二二年刊 当館請求記号 160-98）、『人形百種』（写 当館請求記号 発別5549 『国立国会図書館月報』五一八号参照）、『雛の圖』（写 当館請求記号 発別5544）などがある。

また、晴風は絵びらや文字絵の名手として、『繪美良圖考』（写 当館請求記号 674-1 『国立国会図書館月報』四四八号参照）なる著作や、江戸、明治の風俗研究家として、『神田の伝説』（神田公論社 一九一三年刊 当館請求記号 YD5-H-339-304）、『江戸名物部類』（江戸町名俚俗研究会 一九五九年刊 当館請求記号 596.1-S3836）、『世渡風俗圖會』（写 八冊 当館請求記号 1-37）、『街の姿 晴風翁物売り物貰い図譜 江戸篇』（太平書屋 一九八三年刊 当館請求記号 GD11-91）といった著作を残した。

晴風は、当時の諸文化人の交流の場で、文化財などを収集、鑑賞する趣味の会であった集古會に参加し、彫刻家の竹内久一、人類学者の坪井正五郎、藏書家の林若吉（若樹）、文学者の淡島寒月、内田魯庵、仮名垣魯文、幸堂得知、巖谷小波、洋学者の大槻如電、歴史学者の尾佐竹猛、落語家の談州楼燕枝などと親交を深めていた。

本書中には、神田生まれの江戸っ子気質、洒落っ気や絵のたくみさなど晴風らしさが随所に見られるだけでなく、

たとえば、玩具研究家として、義士人形、一文人形、千木筥などの玩具の絵が、風俗研究家として、廣目屋などの明治期の新商売、しんこ細工や鉛細工の職人が、交友関係として、集古會、坪井正五郎などが取り上げられていて、晴風の多面的な顔を其処此処に見ることができるといえる。

三、類書について

東京の著名な商家、名所、旧蹟などを体系的に紹介した資料としては、『東京名物志』（二冊 松本道別著 公益社 一九〇一年刊 当館請求記号 YDM203094）、『東京風俗志』（三冊 平出鏗二郎著 富山房 一八九九-一九〇二年刊 当館請求記号 YDM27369）などが、また、東京の観光案内的な資料としては、『東京買物独案内』（一七四丁 上原東一郎編 刊 一八九〇年刊 当館請求記号 YDM43838）、『東京案内』（三冊 東京市市史編纂係編 裳華房 一九〇七年刊 当館請求記号 YDM203555）、『東京名所鑑』（三冊 相沢朮著 東崖堂 一八九二年刊 当館請求記号 YDM24162）などがある。ここに紹介する『東京名物百人一首』は、これら類書と異なり、明治時代後期の東京で、大衆に幅広く浸透していた風俗、流行、娯楽などの文化的、社会的現象を、当時第一級の趣味人であった清水晴風を通して紹介しており、当時の庶民文化の実相を後世に伝えようとする、彼の意図が充分に伺える資料といえる。

以下に、序文および本文を翻刻し、名物や挿絵の内容を紹介することにより、博学で在野の文化人として知られた清水晴風が、独自の視点で選んだ当時の東京名物を明らかにしてみたい。

凡例

・『東京名物百人一首』（清水晴風著 当館請求記号

㏍J10）の序文および本文の全文を翻刻し、本文の後に事項索引と人名索引を付した。

・本歌の作者の上に「一から一〇〇」までの歌番号を付し、事項索引、人名索引の検索番号とした。

・本文は、歌番号、本歌の作者、（ ）内に本文の丁数、本歌に擬した和歌、名物（網かけ）と記載された絵や文の解説、翻字の順に記述し、末尾の*以下に『小倉百人一首』収録の本歌を記した。

・解説文中の人名には、生没年が明らかな場合は、人名の後の（ ）内に可能な限りそれを記した。

・翻刻文中の「□」は解説不能箇所。

〈序文〉

京極黄門藤原定家卿小倉の山荘に在て百人一首を撰ミ給

ひしより後是に擬するの歌集世に出しもの其数殆と枚挙に^{〔遠か〕}遑なきほどあるならむ就中近藤助五郎清春カものせし道化百人一首の如きハよく其当時の情態を写出し式百年のむかしを追想せむるの感あり爰に於て予思ふに現時東京に在りて最も繁榮なる商家喰物店名家に及び人物等を挙げ百人一首に擬し紙中に商標或ひハ其家に関せし印刷物^{〔貼カ〕}付し置カは後世に至り必ず清春乃道化百人一首を今見るの思ひあらしむるならんと昼寝の余暇にこれを著し名付て東京名物百人一首となれり

明治四十年八月 清水晴風しるす（朱印）（口絵一、参照）

〈本文〉

一、天智天皇（二丁表）

商人^{あきじと}の泰斗の家はともあらみ誰が衣^{たしろも}でも三越にて買ふ

・三越呉服店：発祥は延宝元年（一六七三）、伊勢松坂の商人三井高利（一六二九—一七〇四）が、日本橋に開いた呉服店越後屋。大衆相手の店前売りの商法で繁盛し、江

戸時代最大の呉服商といわれた。明治三十七年（一九〇四）、株式会社三越呉服店となった。「三越呉服店」の朱印の一部と、広報誌『時好』（四卷四号 一九〇六年 四月刊）の表紙の一部が書き写されている。

（口絵二、参照）

*秋の田の^{かりほ}飯庵の^{いほ}庵の^{うま}苦をあらみわが衣手は露にぬれつつ

二、持統天皇（二丁裏）

春過すむて夏の陳列ちんれいは白木屋の衣ころもほしてふ数あまた多人山たごやま

・白木屋呉服店：近江の白木屋大村彦太郎（一六三六―八九）が、寛文二年（一六六二）、江戸で呉服物を扱ったのが発祥。「白木屋呉服店 洋服店 東京日本橋通壹丁目 電話 本局八一八二八三（特）四七五 SHIROKIYA TOKYO SILK & WOOLLEN STORE」と記された広告の中央下には蚕蛾さなぎが描かれている。

*春過すむぎて夏来なつこにけらし白妙しろたへの衣干かすてふ天あまの香具山かぐやま

三、柿本人麿（麻呂）（二丁表）

あし曳ひの山の手かけて電車道ながく引くもひとり獨占

・東京電車鐵道株式會社：明治一五年（一八八二）、新橋～日本橋間で營業を始めた東京馬車鐵道は、明治三六年（一九〇三）、動力を馬から電氣にかえ、社名を東京電車鐵道と改め、品川～新橋間で東京初の電車營業を開始した。「聯編R2142 三十回 回数乗車券 東京電車鐵道株式會社 通行税とも 金九十五錢 使用期限 明治卅八年 四月末日まで」と記された回数券が書き写されている。

*あしひきの山鳥の尾の垂たり尾の長々し夜よをひとりかも寝む

四、山邊赤人（二丁裏）

玉の艶あさむくミツワ石鹼ハふ尺より高く人は知りつ、

・ミツワ石鹼：万延元年（一八六〇）、三輪善兵衛が、日本橋に化粧品化粧品の製造販売を中心とする丸見屋を創業。明治四三年（一九一〇）、ミツワ石鹼の発売を開始。「Mitsuwa Soap」と記された石鹼の絵と、「丸見屋製」と記された印が書き写されている。

*田子の浦にうち出でて見れば白妙しろたへの富士の高嶺たかねに雪は降りつつ

五、猿丸大夫（三丁表）

奥山おくやまの雲にそびえし十二階見下す時ぞ領あざは冷たし

・凌雲閣：浅草十二階と呼ばれた、赤煉瓦造りの八角形の高塔。明治三年（一八九〇）に建てられ、大正一二年（一九二二）の関東大震災で崩壊するまで、日本一の高さ（約六七メートル）を誇っていた。入場料は大人六錢、軍人小児は半額だった。「明治卅九年四月廿二日 廿三日 廿四日 廿五日 廿六日 廿七日 廿八日 浅草公園 十二階半額觀覽券 社團法人 軍人遺族救護會」と記された觀覽券が書き写されている。

*奥山おくやまに紅葉踏もみぢみわけ鳴く鹿の声聞く時ぞ秋は悲しき

六、中納言家持（三丁裏）

神田からわたせるはしハ御茶の水直下を見れば目ぞ覚おぼにけり

・お茶の水橋：明治二四年（一八九二）、原龍太（二八五四―一九二二）の設計により、神田川沿いの駿河台西紅梅町と、湯島三丁目高等師範学校前との間の断崖に架設された鉄橋。全長三八間。溪流と緑蔭の美で知られた。現在の橋は昭和七年（一九三二）に改架された鋼橋。お茶の水橋の素描あり。

*鵲かさねの渡せる橋におく霜の白きを見れば夜ぞ更けにける

七、安倍仲麿（麻呂）（四丁裏）

婦人等の振よき見れば春日オイルみやびの香ある煉油かも
・カスガオイル：「宮内省御用品」であった毛髪用ねり油。和服姿の母と娘が描かれた広告には、「高評煉香油 THE HAIR OIL カスガオイル 紳士貴婦人用 水油代用 ねり油 直輸入 發賣元 東京 小川潮華園 到る處の 化粧 小間物店 賣藥店にあり」と記されている。

*天の原振りさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも

八、喜撰法師（四丁裏）

わが市しく區の都の中央日本ばし茶は山本と人はいふなり
・茶商の山本嘉兵衛：山本山で知られる茶商。創業は元禄三年（一六九〇）。文化一三年（一八一六）、幕府本丸御用茶師となり、明治一八年（一八八五）、東京府庁より茶葉鑑札第二号を受けた。「嘉宇治信樂諸國御茶

所 東京日本橋通貳丁目 本家山本嘉兵衛製 茶問屋御小賣」と書かれた広告が書き写されている。

（口絵三、参照）

*わが庵ははは都のたつみしかぞ住む世を宇治山と人はいふなり

九、小野小町（五丁裏）

花の色うつりにけりな白粉は御園化粧乃名こそ弘まる

・御園白粉：明治三七年（一九〇四）に、伊東胡蝶園から発売された無鉛白粉。明治の末頃までは、役者や芸者を中心に、使用感、仕上がりのよさから、鉛中毒をもたらす鉛白粉が使われていた。豊寿舞（二人の巫女が雄蝶と雌蝶にそれぞれ扮して舞う）が描かれ、「御料御園白粉 東京芝 胡蝶園謹製 發賣元丸見屋商店」と記された広告が書き写されている。（口絵四、参照）
*花の色は移りにけりないたづらにわが身世にふるながめせし
まに

一〇、蟬丸（五丁裏）

これやこの行も帰るも六あみだ人も彼岸は大方の慈悲
・六阿弥陀参り：豊島左衛門の娘、足立姫が姑にいびられたすえ沼田川に身を投げ、五人の腰元もそのあとを追うと、六人の供養のため六体の阿弥陀像が彫られ、六つの寺に奉納された。文化年間（一八〇四―一八）よ

り昭和の始め頃まで、荒川沿いに、下谷広小路常楽院から亀戸常光寺までの六里の道を歩く、一巡六里といわれた六阿弥陀の巡拝が盛んに行われた。他に、西久保から目黒を巡拝する西方六阿弥陀参り、四谷から赤坂を巡拝する山の手六阿弥陀参りが知られた。「彼岸の六阿弥陀参りハ毎年春秋二期の彼岸中善男善女老若を不問参詣して後世を願ふ此行事昔しも今もかわりなし是も東京名物に加べき舊事保存の一ツ也」と記載あり。

*これやこの行くも帰るも別れては知るも知らぬも逢坂の関

一一、参議篁(六丁表)

術の華上野園に古器出ると八人には観せよ美術協会

・日本美術協会：龍池会(一八七九年設立)を前身とする美術団体。明治二〇年(一八八七)、名称を日本美術協会と改め、上野公園内に会館を建て、春と秋に美術展覧会を開催、美術行政を担う機関へと発展していった。桜の絵あり。「第三十六回美術展覧會特別入場券日本美術協會」と記された入場券が書き写されている。

*わたの原八十島かけて漕ぎ出でぬと人には告げよ海人の釣舟

一二、僧正遍昭(六丁裏)
玉すかで光線の通路写してや乙女の姿板にと、めん

・小川一写真真店(小川写真製版所)：小川一真(一八六〇—一九二九)はポストンで写真術を修業し、明治一八年(一八八五)、飯田町に写真館「玉潤館」を開業すると東京有数の写真家として知られるようになった。二一年(一八八八)、日本初のコロタイプ写真製版、印刷を開始。翌年、京橋区日吉町に小川写真製版所を開き、二七年(一八九四)、写真銅板の製版、印刷に着手した。四三年(一九一〇)、帝室技芸員を拜命。写真の産業化、写真文化の発展に大きな足跡を残した。写真撮影に使われた用具の一部が描かれている。「小川一写真真店ハ当今写真界の冠にして東京名物の一也」と記載あり。

*天つ風雲の通ひ路吹き閉ぢよをとめの姿しばしとどめむ

一三、陽成院(七丁表)

築地にてわけて名高き印刷の活字揃ふて文字となりぬる

・東京築地活版製造所：鉛製活字製造の始祖である本木昌造(一八二四—七五)の高弟、平野富二(一八四六—九昌造(一八二四—七五)の高弟、平野富二(一八四六—九二)が、師の許諾を得て明治六年(一八七三)に創業した活版製造印刷所。その製造活字は「築地の文字」と称せられ、全国の印刷所に普及。三六年(一九〇三)に

は、九ポイント活字を始めて紹介した。金属版の絵あり。

*筑波嶺の峰より落つるみな川の恋ぞ積もりて淵となりける

一四、河原左大臣（七丁裏）

町々を弘め歩行ハ誰ゆえぞ皆廣告はわれならなくに

・**廣目屋**：開店や大売出しを宣伝する楽隊などを使った
広告屋。チンドン屋の先駆。大阪からやってきた秋田柳吉が明治二年（一八八八）、京橋五郎兵衛町で広告宣伝の店「廣目屋」（屋号は仮名垣魯文による）を開業。やがて「廣目屋」は、広告屋を意味する普通名詞として用いられるようになっていった。「廣目屋」と記された幟と、編み笠をかぶった和服姿の楽隊の絵あり。『世渡風俗圖會』にも、編み笠をかぶった楽隊の廣目屋や、大八車に商標を飾り付けた廣目屋が描かれている。（巻頭「清福図録」参照）

*みちのくのしのぶもぢずり誰ゆゑに乱れ初めにしわれならなくに

一五、光孝天皇（八丁表）

君方ハ赤坂歌妓の若なつむ誰春もとに彼ははやし家

・**赤坂の春本、林家**：赤坂芸妓の置屋。絵葉書にモデルとして起用され、「日本一の美人」と謳われた萬龍（一

八九四―一九七三）は、春本の芸妓だった。「赤坂春本連中」「赤坂林屋連中」と記された、二枚の白黒写真が描き写されていて、各置屋に所属する芸妓たちの姿が見える。「赤坂にて有名なる春本に及び林家八常に抱へ藝妓五十名内外の者を有し盛大驚ほと也此二家八他に及びなき東京名物の一也」と記載あり。

*君がため春の野に出でて若菜摘むわが衣手に雪は降りつつ

一六、中納言行平（八丁裏）

立わかれ田舎の客の常に来る松の常盤は今盛りなむ

・**常盤津節の隆盛**：初世常磐津林中（一八四二―一九〇六）は、声量が豊富なうえ、ふり切りが綺麗で、無駄節がなく、呼吸つぎの巧妙さが見事であった。演出にも新しい息吹を加え、その声望は大いにあがり、「松島」「松の羽衣」などが大流行し、常磐津節の隆盛を招いた。

*立ち別れいなばの山の峰に生ふるまつとし聞かば今帰り来む

一七、在原業平朝臣（九丁表）

千早振神田乃市場昔より数の野菜に水菓子を賣

・**神田市場**：神田青物市場、神田多町市場ともいわれ、日本橋魚市場と並んで東京を代表する市場であった。明治三〇年代（一八九七―一九〇六）には、市場周辺の

野菜、果物間屋は二〇〇戸以上を数えた。大正一二年（一九二三）の関東大震災により焼失。昭和三年（一九二八）、秋葉原駅北口に移り、一〇年（一九三五）、中央卸売市場神田分場と改称された。野菜や果物の絵あり。「神田市場新年會三十六年二月八日」と記された紙片の一部が書き写されている。

*ちはやぶる神代も聞かず龍田川から紅に水くくるとは

一八、藤原敏行朝臣（九丁裏）

墨の畫ハ殊に雅邦によるさえや筆のかよひじ人のすくらむ

・ 日本画の橋本雅邦：橋本雅邦（一八三五—一九〇八）は、狩野派の大家。明治二三年（一八九〇）、東京美術学校教授、帝室技芸員に就任。三五年（一九〇二）一二月一日、上野の精養軒で銀婚式を盛大に挙行したが、それに先立ち、上野公園で祝賀の展覽會が催された。「明治三十五年十二月五日ヨリ十一日マデ上野公園日本美術協會ニ於テ開會雅邦翁銀婚祝賀繪画展覽會招待券「画寶會」と記された薄い鼠色の招待券が書き写されている。

*住の江の岸に寄る波よるさへや夢の通ひ路人目よくらむ

一九、伊勢（一〇丁表）

業のミじかき梶の鋏太郎わざで此世をすじしてよとや

・ しんこ細工の梶鋏太郎：しんこ細工とは、しん粉を用いた細工菓子的一種で、縁日や祭りなどの時、大道で行商された。梶鋏太郎は旧幕臣。そのしんこ細工は巧妙を極めたが、最も得意とした細工は亀の子だった。緑色の手提げ籠の中には、りんごや桃などをかたどったしんこ細工の絵あり。「梶鋏太郎ハ牛込築土邊に住ししんこ細工の名人にて諸方園遊會又ハ宴會の席上に招かれて興を添ること屢々有これ東京名物の一ツ也」と記載あり。『世渡風俗圖會』では、「しんこ細工の桑吉」「しんこ細工」と題して、二件のしんこ細工職人が描かれている。

*難波濁短き葦のふしの間も逢はでこの世を過ぐしてよとや

二〇、元良親王（一〇丁裏）

術なれや今はたおなじ細工にて身を尽したる館屋とぞ思ふ

・ 鉛細工の小松齋一流：鉛細工は、白鉛で動物や植物などの形を作る細工菓子的一種。蛤と、その中に横たわる猫をかたどった鉛細工の絵あり。「小松齋一流写實的鉛細工の達人也」と朱書あり。『世渡風俗圖會』では、「細工鉛」と題して鉛売りの姿が描かれ、「明治三十四年頃に見るもの也」という記載がある。

*佐びぬれば今はた同じ難波なるみをつくしても逢はむとぞ思ふ

二一、素性法師（一一丁表）

今金といひし昔しハ生肉なまにくに家鴨あいかものすきしやも出るかな

・しやも屋、今金：今金（店主、長谷川てる）は、神田区鍛冶町にあつたしやも鍋、鳥料理の専門店。神田区連雀町にあつた金清楼（店主、長谷川清吉）は同系列の割烹店で、家や庭が広く、官吏や学生の客で繁盛した。しやも鍋の絵あり。「東京のしやも屋といへは今といふ字を必ず冠るが定式の如し其元ハ今金を以て初めとすされとも今金ハ既に金清楼となり又神田の今金ハ廃業して今金の名絶たり」と記載あり。

*今来むといひしばかりに長月の有明の月を待ち出でつるかな

二二、文屋康秀（一一丁裏）

深川ふかがわに明も塞ふさぐも積つみこむ込も軒並蔵のきなみくらを倉庫といふらむ

・深川の倉庫（蔵）：深川は小名木川など運河が縦横に通じる低湿地帯で、江戸時代以来、東京湾沿いに埋立地が造成され、水運を利用した倉庫業、廻米問屋、材木問屋などの商業が発展。商品流通の拠点として、独特の倉庫街を形成してきた。連なる倉庫（蔵）の屋根部分の絵あり。

*吹くからに秋の草木のしをるればむべ山風をあらしといふらむ

二三、大江千里（一二丁表）

数寄見すきみ禮婆れいば四時に物こそ樂しけれわがミ一ツの茶器ちやくきにハあらねど

・茶の湯、茶器の流行：明治期には、井上馨（号は世外、一八三五―一九一五）や益田孝（号は鈍翁、一八四八―一九三八）など官財界の富豪に茶の湯を趣味とする数寄者が多く、特に東京では、財界の数寄者による茶器の収集が盛んとなり、貴重なコレクション（後の根津美術館や五島美術館などの収集茶器類）が構築された。また、裏千家などの既成流派も、東京での流儀の普及につとめた。茶碗と「小倉山」と記された茶杓筒の絵あり。

*月見れば千々に物こそ悲しけれわが身一つの秋にはあらねど

二四、菅家（一二丁裏）

此度ハ著作もとりあへず出版に書籍しよせきの知識ちしきかづのまに

・博文館：明治二〇年（一八八七）に、大橋佐平（一八三五一―一九〇一）が創業した出版社。『太陽』『少年世界』『文藝倶楽部』などの大衆向け雑誌を創刊し、大いに業績を伸ばした。長男の新太郎（一八六三―一九四四）が経営を引き継ぐと、製作から販売までを掌握する総合的な出版社に発展し、三〇年代（二八九七―一九〇六）には博文館王国を築いた。「大橋博文館明治書籍出版板之

王にして東京名物の一也」と記載があり、「各四島に至十一月四日東京市日本橋區本町三丁目博文館（振替貯金口座番號二四〇番）編輯部用□□部用本局千〇十八番千六百廿五番□□三百〇三番 □番□□□界毎月一日發行一冊金拾錢□□五日發行」と記された雑誌の奥付の一部分が書き写されている。

（口絵五、参照）

*このたびは幣も取りあへず手向山紅葉の錦神のまにまに

二五、三條右大臣（一二三丁表）

浪花節大坂よりの雲右衛門人に知られて来るよしもかな

・浪花節（浪曲）の桃中軒雲右衛門：桃中軒雲右衛門（一

八七三―一九一六）は、武士道を鼓吹し赤穂義士伝を得意とした。雄渾莊重な迫力ある節調によつて人気を博し、浪花節の社会的地位の向上に貢献した。雲右衛門の肖像画と幟が描かれていて、幟には「桃中軒雲右衛門入道」と記され、赤穂義士の着物の模様も見える。「桃中軒雲右衛門といふ浪花節の名人大坂より上京し本郷座に於て三十日間興行せしに其席上等を壺円としたるにか、わらず毎夜客留の盛覧を提し益々浪花節の聲價を高めたるハ雲右衛門其者の藝術の妙に依る所と虽も爾來浪花節を以て東京名物の一を示るに至りしハ流石雲右衛門の力なりき」と記載あり。

（口絵六、参照）

*名にし負はば逢坂山のさねかずら人に知られでくるよしもがな

二六、貞信公（一二三丁裏）

小倉羹美味乃干菓子に玉簾ハ今西川岸の舗をまたなむ

・榮太樓總本舗：安政四年（一八五七）、細田安兵衛（一

八三―一九三幼名、榮太郎）が創業した菓子屋。「甘名納糖」「梅ぼ志館」などが人気を集め、明治中頃には東京府下で、一番の売り上げを誇る菓子屋となった。「榮太樓總本舗」「榮太樓」と記された商標が書き写されている。

*小倉山峰のもみち葉心あらば今一度のみゆき待たなむ

二七、中納言兼輔（一二四丁表）

草津からわきて流るゝ温泉に客が来とてかゆあミするらむ

・浅草田甫 草津亭：草津亭は明治一八年（一八八五）、

草津温泉から湯の花を持ち帰り、温泉割烹を始めた料亭。緑の木々におおわれた料亭の遠景（屋根部分と広い庭）が描かれている。

*みかの原分きて流るる泉川いつ見きとてか恋しかるらむ

二八、源宗于朝臣（一二四丁裏）

山の手に残さびしき旅藝妓人ハ安きを買と思へは

・山の手の芸妓（俗稱、水天）：芸妓を意味する「猫」の
人形の絵あり。「山の手邊の藝妓ハ俗に水天と稱する
もの多く極めて安直に客に應ずる故に却て藝ある者よ
り繁昌する此変則カ東京名物の一ツ也」と記載あり。

*山里は冬ぞ寂しさまさりける人目も草もかれぬと思へば

二九、凡河内躬恒（一五丁表）

心あてに行ばや見せん團子坂人形造るしらくくの花

・團子坂の菊人形：菊人形は、人気役者や花鳥などの人
形の衣装を、菊の花や葉を組み合わせて作った細工物
で、江戸後期に見世物として始まった。明治九年（一
八七六）から木戸銭（入場料）を取って正式に興行化
し、東京の秋の名物として繁栄した。二〇年代から三
〇年代（一八八七―一九〇六）が最盛期で、植惣、種半、
植梅、植重の四大園が毎年出し物を競い合い、歌舞伎
や最新のニュースネタを、廻り舞台やパノラマ装置を
用いて見せた。生人形師による迫真の頭も評判で、根
津裏門前より駒込の狭い團子坂には群集が殺到した。
人形の衣装に使用する小菊の絵あり。

*心あてに折らばや折らむ初霜のおきまどはせる白菊の花

三〇、壬生忠岑（一五丁裏）

あら金の土もて造る陶器商盃斗り焼ものでなし

・三銀陶器店：店主、加藤銀次郎は水石園と号し、盆景
（庭の雛形）、盆栽を研究し通人として知られた。番茶
道具や水こんろで評判となり、瀬戸雛や陶製兜人形な
どの人形類も販売し、三銀の名を世間に広めた。各種
の陶器の絵あり。急須の絵と「新橋際美術陶器舗三銀
火：三銀は：壹組七拾：」と記された広告の一部が
書き写されている。

*有明のつれなく見えし別れより暁ばかり憂き物はなし

三一、坂上是則（一六丁表）

朝まだきあんかけの好きと来る客の根岸の里に知れる笹が
雪

・豆腐料理の笹乃雪：元禄年間（一六八八―一七〇四）に、
京都の宮家出入りの豆腐職人だった玉屋忠兵衛が、江
戸で初めて絹ごし豆腐を作り、音無川のほとり、根岸
の里に豆腐茶屋を開いたのが始まり。「笹の雪」の屋号
は、輪王寺宮が「笹に積もる雪のように白くて柔らか
い」と称賛したことになむ。箸、二つに重ねた碗、
碗に盛られたあんかけ豆腐の絵あり。「根岸新田二軒
茶屋きぬこし御膳笹乃雪玉忠」と記された広告が書
き写されている。

*朝ぼらけ有明の月と見るまでに吉野の里に降れる白雪

三二、春道列樹（一六丁裏）

山の上に金をかけたる様は詠もあえぬ紅葉なりけり

・紅葉館：明治一四年（一八八一）に、芝の紅葉山に開業した、純和風の会員制高級料亭。紅葉の装飾を施した豪華な内装の和風建築と、紅葉をあしらった着物姿の美人女中たちの接待が評判だった。文士や政治家たちが、サロンとして頻繁に利用していた。東京大空襲で焼失。現在跡地には東京タワーが建っている。紅葉の葉の絵あり。「芝山内にて著名なる紅葉館は東京名物の一也」と記載あり。

*山川に風のかけたるしがらみは流れもあへぬ紅葉なりけり

三三、紀友則（一七丁表）

久方の光り長閑き寶丹ハしづ心よく薫る効能

・胃薬「宝丹」の守田治兵衛商店：宝丹は文久二年（一八六二）、九代目守田治兵衛（一八四一—一九一三）が、オランダの陸軍軍医ボードイン（一八二〇—九〇）から製法を教授され、コレラの予防薬として発売された。その後、官許第一号の公認薬となり、西南戦争の際には軍旅必携薬の指定を受けた。「登録商標大日本守田寶丹定價金拾錢…」明治四年辛未二月二十四日大學東校免許 MORIYA'S HOTAN 起死回生寶丹癸未第一月良辰改版文久二年始て是を製する所にして近來もつ

はら世に行る、良劑也その効よく口中をきよくしむね

をすかせ四時の痒氣をはらひ百毒を解す人もし常に懐中し其機に臨んで之薬を服セバ必ずその身をして健全無病の大幸を得せしむることさらに疑ひあるべからず官許本家 東京池之端仲町貳拾七番所有地 守田治兵衛「守田氏」（朱印）明治十年從警視廳蒙軍用之命也」と記された宝丹の広告が書き写されている。

*久方の光のどけき春の日に静心なく花の散るらむ

三四、藤原奥風（一七丁裏）

誰をかもしる人にせむ高輪の墓は忠義の友ならなくに

・泉岳寺義士遺物陳列場：義士人形（高輪泉岳寺に安置された四七士の木像を模した土人形で、明治四〇年（一九〇七）頃まで参拝客相手に売られていた）の内、大高源吾の人形の絵あり。同様の絵を清水晴風はその著『人形百種』の中で「高輪人形」として紹介している。「泉岳寺義士遺物陳列場特」と記された紙片が書き写されている。（口絵七、参照）

*誰をかも知る人にせむ高砂の松も昔の友ならなくに

三五、紀貫之（一八丁表）

人は知る小間物老舖白牡丹花ぞ美術乃香に匂ひける

・白牡丹：寛政二年（一七九〇）、大奥出入りの御用商人

だった松田幸二郎が、尾張町で創業した和装小間物店。店名の「白牡丹」は、白粉の銘柄に由来する。商家の大西榮輔（？―一八九三）は、「大西白牡丹」と称し、婦人頭髪装飾品の意匠家として知られ、また、俳句を嗜み、我隣と号した風流人であった。二代目榮輔（一八七四―？）も新意匠の和装小間物を発売し賞賛を得、その名を大いに広めた。簪や櫛などの絵あり。「東京市京橋區南傳馬町貳丁目白牡丹大西榮輔」と記された紙片が書き写されている。（口絵八、参照）

*人はいさ心も知らず古里は花ぞ昔の香にほひける

三六、清原深養父（一八丁裏）

夏の夜は未だ宵なれば賑しく市區のいづくもはやる縁日
・縁日：縁日は、神社仏閣で祭神や本尊に縁のある特定の日に、祭典や供養が行われるもの。境内の外に露天が並び、お参りの人々で賑わう。明治後期には、日本橋の水天宮や、麴町の二七不動などの縁日が有名であった。日暮れの遅い夏期には、夜遅くまで縁日が開かれ、各種の露店が庶民を楽しませた。植木売りなどの露天商の絵あり。

*夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを雲のいづくに月宿るらむ

三七、文屋朝康（一九丁表）

しら露の風になびきし七草ハ墨田の秋に花ぞ咲ける

・向島百花園：文化元年（一八〇四）、佐原鞠場（骨董商の北野屋平兵衛）によつて開かれた梅園。開園当初は、大田南畝（幕臣、戯作者一七四九―一八二三）や加藤千蔭（国学者一七三五―一八〇八）などの文人墨客が集うサロンであったが、秋の七草などの詩歌にゆかりの深い草木類を多彩に植え込み、やがて、江戸の町人文化爛熟期の文人趣味豊かな名園として、庶民に親しまれるようになつていった。臥竜梅で名高い亀戸の梅屋敷に對して、新梅屋敷、花屋敷とも呼ばれた。茶店では、庭でとれた梅干が茶うけに出された。秋の七草と掛行燈が描かれていて、「百花園」と記された印が書き写されている。掛行燈には、千蔭の手蹟といわれる「花やしき 御茶きこしめせ 梅干もさふるふぞ」の句が見える。

*白露に風の吹きしく秋の野は貫きとめぬ玉ぞ散りける

三八、右近（一九丁裏）

忘れぬ美味を思えば天麩羅ハ人の好ミの多くもあるかな
・天ぶらの天金：天金（店主、池田鐵三郎）は、明治の初め、天ぶらの屋台店として創業したが、調理や味の

よさからたちまち人気がでて、総二階（二階全部が仕切りのない座敷）、黒壁造りの店舗となり、東京を代表する天ぶらの専門店になっていった。高値ではあったが、分量の多いことでも知られた。外側は黒塗り、内側は朱塗り、外側側面に朱色の「天金」の刻印がある重箱の中には、天ぶらと小山に盛られた塩が描かれている。「油證文」「天金」「銀座四丁目天金」と記された印が書き写されている。

*忘らるる身をば思はず誓ひてし人の命の惜しくもあるかな

三九、参議等（二〇丁表）

浅草の堂のかたわら苔ふれて香華の絶へぬ石の燈籠

・浅草寺の六地藏石灯籠：淡島堂入口の外側に建つ、六面に地藏が彫られた石灯籠。絵馬を添えて、病氣回復を祈願する風習がある。明治二三年（一八九〇）、花川戸から浅草寺に移り、鉄網で全体をおおい、周囲に柵が設けられた。六地藏石灯籠の絵あり。「浅草寺觀世音御堂の西方に古き六地藏を刻せし石燈籠有此燈籠ハ六百有余年の星霜を経たる古物にて東京名物乃一ツ也昔鎌田兵衛の建立にして花川戸の入口の所に有りしを今該所に安置す当時此燈籠に祈願する者多く常に参詣たへる事なし」と記載あり。薄葉の紙片が一九丁裏と二〇丁表の間に綴じ込まれていて、紙片には、囲いにお

おわれた六地藏石灯籠の絵と、「東京浅草神社佛閣阿部東真」の記載あり。

*浅茅生の小野の篠原忍ぶれど余りてなどか人の恋しき

四〇、平兼盛（二〇丁裏）

しらぶれハ古色に出にけりわが会ハ物の好なる人ぞ集る

・集古會：明治二九年（二八九六）に創立された在野の骨董品、古書画の研究會。坪井正五郎（一八六三—一九一三）、林若吉（一八七五—一九三八）、山中共古（一八五〇—一九二八）、清水晴風（一八五二—一九二二）ら官民の当時の代表的な文化人が参加した。「集古會ハ好古家の集合會にて創立より本年まで十一カ年をつ、けし名物の集會なり」と記載があり、「…蒐集展覽し談笑娛樂の間に互に其智識を交換するを以て目的としたる會合にして會員は會費として一ケ年金壹圓二十錢（地方會員同金六拾錢）を納むれば毎會に出席し並に本會發行集古會誌（年五回發行）の頒布を得べし 東京市麹町區下二番町四十番地林方 集古會事務所」と記された、集古會の案内の一部が書き写されている。（口絵九、参照）

*忍ぶれど色に出でにけりわが恋は物や思ふと人の問ふまで

四一、壬生忠見（二二丁表）

木挽町歌舞伎座正き立に鳥ル人しれすこそ多ひ株式

・歌舞伎座：福地源一郎（二八四一―一九〇六 号は桜痴）が演劇改良の場として、明治二二年（一八八九）十一月二一日に開場させた劇場。興行師の千葉勝五郎（一八三四―一九〇三）が出資したが、二九年（一八九六）に売却され株式組織となった。市川団十郎（九世、一八三八―一九〇三）、尾上菊五郎（五世、一八四四―一九〇三）らが常に出演し、歌舞伎のひのき舞台として格式を守り続けた。歌舞伎座の座紋「鳳凰丸」が描かれていて、「明治廿二年十一月廿三日歌舞伎座」と記された紙片が書き写されている。（口絵一〇、参照）

*恋すてふわが名はまだき立ちにけり人知れずこそ思ひ初めしか

四二、清原元輔（二二丁裏）

契りちぎきな固かためハ神かみの御前みまへにて末すへはますく波風はなし

・日比谷大神宮での結婚式：日比谷大神宮は明治一三年（一八八〇）、有楽町の大隈重信邸跡に落成した、皇大神宮遙拝殿を起源とする。三二年（一八九九）、神宮奉齋会本院と改称。神前結婚式の創設と普及活動を行い、現在の「神前式」の基礎を築いた。関東大震災後は飯田橋大神宮とも呼ばれ、戦後は宗教学人東京大神宮として再発足した。「日比谷大神宮の御神前にて結婚式を挙る追々に行る是も東京名物之一なるべし」と記載あり。屠蘇飾り（雄蝶と雌蝶の折紙）の絵あり。

「東京市麹町區有樂町三丁目二番地 神宮奉齋會本院」と記された紙片が書き写されている。

*契りきなかたみに袖をしぼりつつ末の松山波越さじとは

四三、中納言敦忠（二二丁表）

あんころの餅の風味にくらぶれハ昔しも芝の名取なりけり

・芝神明（芝大神宮）の太々餅：江戸時代から土産物として親しまれたあんころ餅。芝神明の授与品として著名な、郷土玩具の千木筥（経木で作った小判型の曲物（箱）。三つ重ねにして藁で結ばれ、表面には泥絵具で藤の花が描かれている。千木が千着に通じることから女性の衣服が増えたと、箱の中の煎り豆を食べると雷除けになるとも伝えられる）と生姜（祭礼の生姜祭りは、風邪除けで知られる）の絵あり。「芝宮太々餅」と記された紙片が書き写されている。

*逢ひ見ての後の心に比ぶれば昔は物を思はざりけり

四四、中納言朝忠（二二丁裏）

歐国まなこのてしな奇術も中くく人に眼をくらまざらまじ

・奇術師の松旭齋天：松旭齋天一（一八五三―一九二二）は、西洋奇術をアメリカ人奇術師ジョネスに学び、明治二二年（一八八九）、明治天皇御前公演で政財界の知遇を得、奇術界の第一人者となった。後に「魔術の女

王」といわれた松旭齋天勝（一八八六一九四四）はその弟子。奇術に使う二羽の雀の絵あり。「東洋奇術博士と自称する松旭齋天一ハ其言と其術と一致して実に不可思議なる奇術を演じ大喝采を得市中至る所力興行当らざるなし是東名物の一なりといふ」と記載あり。「西洋大てしな半札此ふだ御じさんのおんかたハ木戸半ねだんにて御らんにいれますひる午后二時始りよる七時始り兩國回向院境内にて西洋奇術大博士松旭齋天一（久松町清泉舎印行）」と記された半札券が書き写されている。（口絵一一、参照）

*逢ふ事のたえてしなくはなかなか人にをも身をも恨みざらまし

四五、謙徳公（二三丁表）

甘味ともいふべきものハ羊羹の美ハ藤むらに限るべきかな

・羊羹の藤村：宝暦年間（一七五一―一七六四）創業の和菓子のお舗。店主は藤村忠次郎。羊羹の他に、松の月（最中）や田舎饅頭も有名だった。「本郷 藤むら」と記された商標と「小倉羹（印あり）」と記された紙片が書き写されている。（口絵一二、参照）

*あはれともいふべき人は思ほえて身のいたづらになりぬべきかな

四六、曾祢好忠（二三丁裏）
野呂の藤わたる家業ハ興行師幾世も廣き小屋乃持かな

・興行師、野呂藤助：野呂藤助（一八二七―一九〇九）は、幕末に両国広小路で大人形（生人形）小屋を開いてその名を知られ、その後、演劇や外国の曲芸、曲馬などを手がけ、日本一の興行師といわれた。「：等々御覽ニ入升月 日興行人野呂藤助」と記された紙片の一部が書き写されている。

*由良のとを渡る舟人かちを絶え行方も知らぬ恋の道かな

四七、惠慶法師（二四丁表）

八重洲はし繁れる家根乃五二館ハ人こそ見へて客は来にけり

・五二館（五二会館）：五二館は明治三十一年（一八九八）、製品、物産などの品評会を主催する五二会（共進会の後身）が設置した会館。四〇年（一九〇七）九月三日に火災により焼失した。五二館では三九年（一九〇六）九月から一二月にかけて、日露戦争の凱旋記念五二共進会が開催され、その記念の絵葉書が発行された。「此巻成て後五二館全部焼失せり」と本書の成立時期を示す記載あり。「凱旋記念五二共進會出品紀念繪葉書」と記され、五二館の洋風の外観を描いた絵葉書が書き写されている。

*八重律茂れる宿の寂しきに人こそ見えね秋は来にけり

四八、源重之(二四丁裏)

火事をいたみ今打鐘うつかねの初出のみ區分くわけて鳶とびの纏まとふ組ぐみかな

・消防組の出初式：江戸時代の町火消(いろは四八組)は

明治維新後、消防組と改称された。明治三五年(一九

〇二)頃より梯子車や蒸氣唧筒ポンプが普及し、東京の大火

は減少していった。「消防ハ昔江戸時代よりいろは四

十八組とて名物の一なりしも今ハ才区より六区にわ

かれ警視廳消防分署之配下に属し江戸当时の面影を残

せし名物の一也とす」と記載あり。出初式に使う、新

年の祝い飾りをつけた鳶口の絵あり。「式ノ順序一整

列ニ檢閲三蒸氣唧筒並水管馬車ノ行進 四目錄授與餘

興ノ順序 一消防組員ノ行進 二梯子乗 三着裝競争 四

綱曳競争 五水管収容競争 六模擬火災ニ對スル救助梯

子ノ應用七蒸氣唧筒ノ放水」と、出初式の式次第につ

いて記した紙片が書き写されている。

*風をいたみ岩打つ波のおのれのみ砕けて物を思ふころかな

四九、大中臣能宣朝臣(二五丁表)

瓦斯電氣日々に焚火の夜ハもえて昼盤消ひるハきつ、物の理を思へ

・日本電燈會社：明治一五年(一八八二)、銀座でアーク

灯が点灯されると、見物人が後を絶たないほどの人氣

となり、翌一六年(一八八三)には、矢嶋作郎、大倉喜

八郎(一八三七—一九二八)ら実業家たちの手により、東

京電燈會社が設立され電気事業が始まった。同社は、

二三年(一八九〇)、菊池治良兵衛らにより設立された

日本電燈會社と合併。四四年(一九一一)、新たに日本

電燈會社が設立されると、東京電燈、東京市電の二社

と市場を激しく争う状況となった。この争いは、大正

六年(一九一七)に協定が結ばれたことにより終結し、

九年(一九二〇)、日本電燈會社は東京電燈會社に買収

された。「日本電燈會社」と記された上に、「日本電燈

會社創立事務所印」と記された印が押されている紙片

あり。

*御垣守衛士みかきもりまじのたく火の夜は燃え昼は消えつつ物をこそ思へ

五〇、藤原義孝(二五丁裏)

婦女ふぢよの為ために匂におふ油あぶらの井筒いづつさへ永ながくためせば多おひ黒髮くろかみ

・井筒香油：香油とは、髪や体につける香りのいいオイ

ルのこと。井筒屋香油店は明治五年(一八七二)に創

業。田所町の井善より売り出された井筒香油、香水は、

内国博覽会で賞牌を得た上等品だった。「登録専用有

権商標あ徒、油東京井善製 PREPARED BY IZENS」

と記された商標が書き写されている。

*君がため惜しからざりし命さへ長くもがなと思ひけるかな

五一、藤原実方朝臣（二六丁表）

龜戸かめとのこれぞ名代の葛餅くづもちハ流石田舎さすがいなかの客ガ多おほひハ

・龜戸神社の藤と葛餅：龜戸天満宮は、寛文二年（二六六二）、大宰府の神官大鳥居信祐が、菅原道真の像を小祠に祀り、翌年、大宰府に模した社殿を造営したのがその起り。明治六年（一八七三）、龜戸神社と、昭和一年（一九三〇）、龜戸天神社と改めた。学問の神様として信仰を集め、藤と梅の名所で知られ、『名所江戸百景』（安藤広重画 一八五六一八八年版 大判錦絵 一一八枚揃）にも描かれた古刹である。龜戸の名物、葛餅は屋台売りの他に、文化二年（一八〇五）に天神社参道にて創業した船橋屋が人気を集め、その葛餅は龜戸餅とも呼ばれた。葛餅と藤の絵あり。「名代久壽餅」と記された紙片の一部が書き写されている。『世渡風俗圖會』では、屋台売りの「龜戸名物葛餅」が描かれている。

*かくとだにえやはいぶきのさしも草さしも知らじな燃ゆる思おもひを

五二、藤原道信朝臣（二六丁裏）

勝ぬれば負るもあらむ競馬会猶うらめしき池上の穴

・東京競馬会 池上競馬場：明治三十九年（一九〇六）、加納久宜（一八四八—一九一九子爵）や安田伊佐衛門（一

八七二—一九五八陸軍中尉）らが発起人となって、東京競馬会を設立、荏原郡池上村の耕地に池上競馬場を建設した。同年一月から二月にかけて、同競馬場で、日本人による最初の馬券を発売した洋式競馬が開催され、大盛況を呈した。回転する二匹の競走馬（旗をさした騎士を乗せている）の玩具が描かれている。『世渡風俗圖會』では、「新發明競馬競漕運動手遊賣」という商売の中で、この玩具が描かれている。

*明けぬれば暮るるものとは知りながらなほ恨めしき朝ぼらけあさかな

五三、右大将道綱母（二七丁表）

招きつまね、二人寝る夜乃仇まくらいかにしたしき歌妓かきの不見転みづてん

・不見転：不見転とは、歌妓（芸妓）が客を選ぶことなく、たやすく売春すること。「みずゆき」「みず」「転芸者」などともいわれた。歌妓と大尽をかたどった、一文人形（幕末に浅草を中心に、鏝銭一文で庶民に売られた小さな土製の人形）の絵あり。『うなゐの友』（初編）に類似の絵あり。晴風は安値で体売る不見転を、安値で売られた一文人形と対比させている。

*嘆きつつひとり寝る夜の明る間はいかに久しきものとかは知る

五四、儀同三司母（二七丁裏）

造れじな奈良墨の模写かたけれど唐のかさりの遺墨ともかな

・製墨の古梅園：古梅園は天正五年（一五七七）、奈良の松井道珍が創業した製墨の老舗。代々、皇室や幕府の御用墨所を勤め、「紅花墨」「神仙墨」などの製墨で知られた。日本橋の古梅園（店主、芹川ふみ）は、奈良古梅園の東京支店であった。「日本橋通一丁目の古梅園ハ製墨の老舗にして東京の名物也」と記載あり。「古梅園」と記された製墨の絵と、「御用御墨所古梅園製墨官工南都松井和泉掾[㊦]」と記された商標が書き写されている。

*忘れじの行末まではかたければ今日を限りの命ともがな

五五、大納言公任（二八丁表）

瀧の音の絶へで久しき十二社夏ハ涼しく猶聞取けれ

・角筈十二社（熊野神社）：角筈十二社は、現在の西新宿四丁目あたりにあった。「大滝」と呼ばれた滝や大きな池があり、『名所江戸百景』などにも描かれたほど、江戸時代から遊興地として親しまれていた。明治以降は花柳界でも知られた場所、池の周りは料亭や茶屋で賑わったが、その池も昭和四三年（一九六八）に埋め立てられてしまった。「大滝」の絵あり。「角筈十二社ハ近年夏季に至れハ都下の納涼者群集し境内の池畔に数

多の拭茶屋あり又崖上より落る殊に涼しく此池東京名物の一に撰ミしもひるき眼にハあらずと云爾」と朱書あり。薄い赤色の紙片には「角筈十二社櫻山際」と記されている。

*滝の音は絶えて久しくなりぬれど名こそ流れてなほ聞こえけれ

五六、和泉式部（二八丁裏）

あらざらむ此家特旨すゞめ焼鮎一串を買ふよしもかな

・鮎儀の雀焼き：江戸時代から大正時代まで、千住川で捕れる鮎は「千住鮎」や「こむらさき」といわれて風味がよく、小鮎を使った「雀焼き」（小鮎を開いた形が「ふくら雀」に似ていることによる呼び名）は千住の名物だった。数匹の小鮎を串刺しにした雀焼きの絵あり。「千住宿鮎儀の雀焼ハ美味にして他に及ぶ物なし故に東京名物乃一に算ふ」と記載あり。正方形の紙片には赤色で、「千住名産鮎乎元河原市場」と記されている。

*あらざらむこの世のほかの思ひ出に今一度の逢ふこともがな

五七、紫式部（二九丁表）

めぐりあいて見しや神田の古着市ぼろかくれにし夜着の裾かな

・神田柳原の古着市場：神田柳原（川岸通り）、神田岩本

町、芝日陰町は、古着屋が軒を列ね古着市場として知られた。殊に、柳原はつるしの古着屋が多く、「柳原物」「柳原仕立」といえば古着を意味した。「神田柳原の古着市場明治以前より最も名高し又近年ハ官許を得て公然なる市場を建設し年中朝市の盛りなること他に類を見ぬ東京の一名物なり」と記載あり。

*めぐり逢ひて見しやそれとも分かぬ間に雲隠れにし夜半の月かな

五八、大式三位（二九丁裏）

有馬家に祠る社は水天宮いでそよ人の詣でやわする

・水天宮：水天宮は文政元年（一八一八）、久留米藩主の有馬頼徳（一七九七—一八四四）が、三田赤羽の藩邸内に久留米水天宮を勧請したのが始まり。明治五年（一八七二）に、現在の日本橋蠣殻町に移った。安産、水難除けの神として知られ、毎月五日には、縁日が開かれ多くの参詣者で賑わった。縁日の際に参道では鏡餅が売られ、購入した参詣者には、厄除けのため火打石で切り火が切られた。半紙に包まれた鏡餅と、「吉井女作」と書かれた紙を添付した火打金（火打鎌）と、火打石の絵あり。

*有馬山猪名の笹原風吹けばいでそよ人を忘れやはする

五九、赤染衛門（三〇丁表）
蓮からにねむきめ覚めて不忍に今咲花の色を見るかな

・不忍池の蓮：不忍池は、上野公園の南西部にある周囲二キロメートルの池。天海僧正（一五三六—一六四三）は、この池を琵琶湖に見立て、竹生島になぞらえた中島を築造し弁天堂を建てた。江戸時代以来、文人墨客の集う蓮の名所として知られ、その壮観さは訪れる人々を魅了してきた。蓮の花の絵あり。

*やすらばで寝なましものをさ夜更けてかたぶくまでの月を見しかな

六〇、小式部内侍（三〇丁裏）

羽根田浦濱邊の道の遠ければ未だ穴守の鳥居潜らず

・穴守稲荷：羽田村の鈴木新田の潮除守護神として、江戸時代から祀られていた稲荷の小祠が、明治一八年（一八八五）、公許を得て穴守稲荷と称し、商人や花柳界の信仰を集めた。三五年（一九〇二）には、京浜電車が参詣用の支線を敷設。赤鳥居や茶店が門前に並び、盛況をきわめた。連なる赤鳥居の絵あり。「海岸蒲田 桃谷大師池端六郷橋雑色 山谷川崎八幡塚穴守大鳥居大森八幡」と記された京浜電車の乗車券が書き写されている。

*大江山いく野の道の遠ければまだふみも見ず天の橋立

六一、伊勢大輔 (三二丁表)

いにしへの奈良の古式乃博物をけふは上野乃館に見る哉

・東京帝室博物館：現在の東京国立博物館の前身。明治五年（一八七二）、文部省博物館と称して上野公園に創設された。三三年（一九〇〇）、東京帝室博物館と改称し、昭和二二年（一九四七）までこの名称は使用された。陀羅尼を収める小塔と勾玉の絵あり。「第一九五號有効期限自明治三十九年九月至明治三十九年十二月博物館觀覽券壹人壹回限り此券ハ入場ノ節門衛ニ交付セラレタシ」と記された觀覽券（中央上に「東京帝室博物館印」あり）が書き写されている。

*いにしへの奈良の都の八重桜今日九重にほひぬるかな

六二、清少納言 (三二丁裏)

余をこめて鳥の料理ハ数あれど他に大金の式ハ有せじ

・鳥料理の大金：浅草区千束町にあった、鳥肉専門の会席料理屋。店主は福島福太郎。調理の巧みさ、皿や室内裝飾など一流をもって知られた。「浅草たんぼ大金亭」と記された紙片が書き写されている。

*夜をこめて鳥の空音ははかるともよに逢坂の関は許さじ

六三、左京大夫道雅 (三二丁表)

今八たゞ昔を忍ぶ八百善を人ハ彼是いふよしもかな

・八百善：享保年間（一七一六―一七三六）に開業した、江戸

会席料理の老舗。店主は栗山善四郎。明治時代には、ロシアの皇太子ニコライ（一八六八―一九一八）後のロシア皇帝、ニコライ二世の接待料理を担当するなど、外国にもその名を知られた。浅草山谷にあった店舗は関東大震災で全焼。皿に盛り付けられた料理と碗の絵あり。

*今はただ思ひ絶えなむとばかりを人づてならでいふよしもがな

六四、権中納言定頼 (三二丁裏)

朝まだき市の買出しさまくゝにあらハれわたる川岸の生魚

・日本橋の魚市場（魚河岸）：神田の青物市場と並ぶ東京の代表的な市場。日本橋の東、江戸橋までの日本橋川北岸にあった。明治三〇年代（一八九七―一九〇六）、市場周辺の問屋数は約五〇〇戸。衛生、交通などの面から移転問題が繰り返り起きた。関東大震災で全焼し築地に移転した。魚、蝦などの絵あり。「日時 三月二日午後六時開會會場明治座（傍聴無料）魚河岸非移轉演說會入場券辯士（イロハ順）磯部四郎君脇坂甚兵衛君 田口卯吉君 高本益太郎君 角田眞平君 丸山名政君 島田三郎君」と書かれた演說會の入場券が書き写されている。

*朝ぼらけ宇治の川霧絶え絶えに現れわたる瀬々の網代木

六五、相模（三三丁表）

鰻味うなぎあじじ外たぐひに類なまひハあるものを猶竹葉の名こそ高けれ

・鰻の竹葉亭：竹葉亭は慶応二年（一八六六）、浅瀬河岸（現在の新富町）で、桃井春蔵道場門下生の「刀預り所」を役目とした留守居茶屋として、初代別府金七が創業。二代目金七が、鰻屋を目指し販路を拡大、新富座、歌舞伎座などへ弁当を納入し、名店としての地位を確立していった。二代目金七は書画骨董の見識があり、座敷の調度品は琳派の名品など高雅を極めた。

*恨みわび干さぬ袖だにあるものを恋に朽ちなむ名こそ惜しけれ

六六、前大僧正行尊（三三丁裏）

もろともに仰く上野の山桜花よりもなを隆盛の像

・上野の山の桜と西郷隆盛像：上野の山の桜は、天海僧正（一五三六一―一六四三）が、江戸城鎮護を祈願して寛永寺を創建した時、上野の山の随所に桜の木を植えたことに始まる。桜の名所として知られるようになったのは元禄年間（一六八八―一七〇四）。上野公園入口に建つ西郷隆盛（一八二七―一七七七）像は、明治三十一年（一八九八）の建立で、筒袖に兵児帯姿、わらじばきの像は高村光雲（一八五二―一九三四）の作。連れ添う犬は後藤貞行（一八四九または一八五〇―一九〇三）の作。咲き誇る桜の絵あり。上野の山の西郷隆盛像が描かれた商

標が、書き写されている。

*もろともにあはれと思へ山桜花よりほかに知る人もなし

六七、周防内侍（三四丁表）

猿屋とてこれ斗りなる楊枝舗やなぎばなてりふり町に名こそ高けれ

・楊枝の猿屋：宝永年間（一七〇四―一）創業の楊枝の専門店。総楊枝ふさようじ（歯ブラシ）、妻楊枝の絵あり。「本柳傘かさてりふり町御やうじ品々 さるや七郎兵衛」と書かれた紙片が書き写されている。

*春の夜の夢ばかりなる手枕たまくらにかひなく立たむ名こそ惜しけれ

六八、三條院（三四丁裏）

爰らにもあらでつき抜焼團子おいしかるへき四ツの串ざし

・芋坂の焼団子（羽二重団子）：羽二重団子は、文政二年（一八一九）、もと植木職人の沢野庄五郎が、音無川のほとり、芋坂の地に「藤の木茶屋」を開業し、往來の人々に団子を供したのに始まる。「谷中芋坂の焼團子ハ東京名物のこれも一也」と記載あり。二串の焼き団子の絵あり。「谷中芋坂名代大□□」と書かれた紙片が書き写されている。

*心にもあらで憂き世に長らへば恋しかるべき夜半よなの月かな

六九、能因法師 (三五四表)

辛子好今戸に名ある濱金は墨田の川乃ほとりなりけり

・佃煮の濱金：紫蘇巻や雀焼きなどで知られた佃煮屋。桜の花と、花見の際に食せられた二本の串に刺さった佃煮(紫蘇巻か)の絵あり。桜の花が描かれた二つ折りの紙片が書き写されていて、紙片には、「登録浅草今戸橋□本居はま金電話下谷四百一番」と書かれている。

*嵐吹く三室の山のもみぢ葉は龍田の川の錦なりけり

七〇、良運法師 (三五丁裏)

涼しさに山を登りてながむれば愛宕もおなじ夏の夕暮

・愛宕山の愛宕塔：愛宕山は標高二六メートル。武蔵野台地末端の小丘。山上に愛宕神社があり、正面の男坂は講談、浪曲の「寛永三馬術」の舞台で知られる。明治五年(一八七二)、山下の海岸に鉄道が通り、「鉄道唱歌」の第一番で「愛宕の山」と歌われた。二二年(一八八九)、旅館と西洋料理屋を兼ねた愛宕館が完成し、その隣に煉瓦造り、八角形、五階建ての愛宕塔が建てられた。塔には望遠鏡が設置され、東京の街中のながめを堪能できた。「東京愛宕塔登覧券金四銭」と書かれた登覧券(切符)が書き写されている。

*寂しさに宿を立ち出でてながむればいづくも同じ秋の夕暮れ

七一、大納言經信 (三六丁裏)

廃される神田乃めがねおとづれて橋の名残りに秋風ぞ吹く

・萬世橋(めがね橋)：神田川に架かる橋。寛永年間(一六二四-四四)創架の筋違御門橋が前身。明治六年(一八七三)に洋風石造の眼鏡橋(二拱橋)が竣工され萬代橋と命名されたが、この名称は定着せず、その形状から「めがね橋」の愛称で親しまれ、後に萬世橋とも呼ばれるようになった。三六年(一九〇三)、下流に鉄橋の「新萬世橋」が架設され、旧来の石造の「萬世橋」は「元萬世橋」と呼ばれたが、三九年(一九〇六)に撤去されてしまった。「元萬世□」と記載のある橋の親柱が描かれている。「明治六年之秋比萬世橋を架して明治四十年に廃橋となれとも此橋俗に神田のめがねはし」と称して全国に知られ東京の名物とハなれり」と記載あり。

*夕されば門田の稲葉おとづれて葦のまる屋に秋風ぞ吹く

七二、祐子内親王紀伊 (三六丁裏)

音に聞高價の品乃保儉付かけし時とを賣もこそすれ

・貴金属の天賞堂：明治二二年(一八七九)、江澤金五郎が、銀座尾張町にて印房店を開業したのが天賞堂の始まり。その後、高級貴金属店に発展。殊に、二代目金五郎は、アメリカ留学後、ヨーロッパを視察、帰国後、

時計類の直輸入、蓄音機の普及など業務を拡張させ、天賞堂の基礎を築いた。「明治三十五年十月吉日 東京市京橋區尾張町二丁目十六、十七、十八、十九番地 天賞堂主 江澤金五郎 追啓 本年は開店廿五年に付本月十九日より二十三日迄祝賀として特別割引を爲し併て景品を呈し候事」と書かれた紅白の紙片が書き写されている。

*音に聞く高師の浜のあだ波はかけじや袖の濡れもこそすれ

七三、前中納言匡房（三七丁表）

あら川の堤の桜咲にけり百種乃色の替るもあらなん

・荒川堤の桜：明治一九年（一八八六）、荒川堤の補修の際、七八種、三、二〇〇本余りの桜苗が植えられた。染井吉野のほか八重桜が混植され、白や黄色、淡紅色などに彩られ、荒川の五色桜と呼ばれた。その最盛期は、三五年から四五年（一九〇二—二）頃で、昭和初期までは花見客で賑わった。五色桜の絵あり。

*高砂の尾上の桜咲きにけり外山の霞立たずもあらなむ

七四、源俊頼朝臣（三七丁裏）

賣買する人ハ定期の米相場はげしカレトハ祈らぬものを

・米相場：米相場とは米の先物取引のことで、江戸時代から盛んに行われていた。明治二六年（一八九三）、東

京米商会所が東京米穀取引所に再編され、先物取引が活発化した。「期米市場（十九日）」▲前場は尙高し梅雨の天候申分なきも市米の益々好況を呈せると各地も安からず殊に正米の好賣行を見て正米師の買退くもの多く今朝：より二錢あり後北國多：食に伸び兼た：本」と記された紙片（新聞の経済欄の切抜きか）の一部が書き写されている。

*憂かりける人をはつせの山おろし激しかれとは祈らぬものを

七五、藤原基俊（三八丁表）

握り置しさが与兵衛の手際にて鮑こはだの壽司といふめり

・与兵衛壽司：小泉与兵衛（二七九—一八五八）が、文政年間（一八一—一三〇）に、上方風の押し壽司と異なる江戸前の握り壽司を考案。与兵衛壽司と呼ばれた。屋号は華屋。昭和五年（一九三〇）に廃業。笹の葉の絵あり。「五もく鯨 兩國元丁すしや与兵衛」と書かれた紙片が書き写されている。

*契りおきしさせもが露を命にてあはれ今年の秋もいぬめり

七六、法性寺入道前関白太政大臣（三八丁裏）

術乃華古儀世に出て仕手脇の雲井に召さる梅若乃能

・能の梅若六郎：梅若六郎（五二世、一八二—一八九〇）は、観世流シテ方の能楽師。初代梅若実。能楽堂を建

設し、能を一般に有料で公開するなど能楽の復興に力を尽くした。宝生九郎（一六世、一八三七—一九一七、宝生流で名人九郎と称された）、桜間伴馬（一八三五—一九一七、金春流シテ方）とならんで明治の三名人と謳われた。（口絵一三、参照）

*わたの原漕ぎ出でて見れば久方の雲居にまがふ沖つ白波

七七、崇徳院（三九丁表）

背と腹も土佐にかぎれる鯉節の切手も末はかへんとぞ思ふ
・鯉節のにんべん…元禄一二年（一六九九）、初代高津伊兵衛が、日本橋四日市で、鯉節や塩干の販売を行ったのが始まりの鯉節問屋。代々当主は伊勢屋伊兵衛を名乗り、カギ印に「イ」の字の暖簾を掲げ「にんべん」と称した。天保（一八三〇—一八四四）の頃には国内初の商品券を発行。明治三七年（一九〇四）、鯉節の供給を一手に引き受けるようになった。鯉節と書かれた熨斗袋（熨斗と紅白の水引が添えられている）の絵あり。「戸瀬戸物町 鯉節問屋 高津伊兵衛」と書かれた紙片が書き写されている。（口絵一四、参照）

*瀬を早み岩にせかるる滝川のわかれても末に逢はむとぞ思ふ

七八、源兼昌（三九丁裏）

粟の餅通ふ手取乃曲搗ハ幾世傳えし澤屋名物

・粟餅の澤屋…粟餅は、糯粟を蒸してついた餅のことで、京都、北野天満宮前の澤屋（天和二年（一六八二）創業）が有名。東京では、本郷の澤屋が評判だった。「元祖 粟餅本店 本郷貳丁目 商號澤屋」と書かれた紙片と、「東京本郷あハ餅」と書かれた紙片（粟の絵あり）が書き写されている。

*淡路島通う千鳥の鳴く声に幾夜寝覚めぬ須磨の関守

七九、左京大夫頭輔（四〇丁表）

蒲焼たしなむを嗜客たへの絶間じつなくもち出る皿さの数かず乃多おけき
・鰻の神田川…文化二年（一八〇五）創業の江戸前鰻の老舗（店主、神田茂七）。加賀藩の料理賄い方であった三河屋茂兵衛が、葎簀張りの屋台で鰻を焼いたのが始まり。「御蒲焼」「外神田明神下神田川」と書かれた紙片が書き写されている。

*秋風にたなびく雲の絶え間よりもれ出づる月の影のさやけさ

八〇、待賢門院堀川（四〇丁裏）

なが、らん盛りと知るや牡丹花のみごとくに咲は四ツ目とぞ思え

・本所四ツ目の牡丹…成屋文蔵が、明治から大正末年にかけて開いた牡丹園。本所区徳右衛門町の四ツ目橋にあった。成文の牡丹園とも呼ばれた。現在は墨田区に

ある、牡丹橋という橋にその名をとどめている。牡丹の絵あり。

*長からむ心も知らず黒髪くろかみの乱れて今朝は物をこそ思へ

八一、後徳大寺左大臣（四一丁表）
酒庫さくらの並ぶなら方をながむれば唯新川の影かげぞ繁しげれる

・新川の酒問屋：江戸、東京で酒といえば、伊丹、灘などの上方で造られた酒が下ってきた下り酒が中心であった。下り酒問屋は、霊巖島の新川（現在の中央区新川一丁目）にあった運河、万治三年（二六六〇）の開削といわれる）に集中し、新川の酒問屋といわれた。その代表が大富豪として知られた鹿島清兵衛である。酒問屋の繁栄ぶり、店先や酒蔵の様子は、『江戸名所図会』（斎藤長秋著 長谷川雪旦画 一八三四―三三六年版 七卷二〇冊）の挿絵などから伺い知れる。新川は、昭和二十三年（一九四八）に埋め立てられてしまった。五枚の正方形の紙片（酒瓶または酒樽に貼付される商標か）にはそれぞれ、「名酒大関」（注連縄の絵あり）、「名酒日本盛醸」（名酒戎宝之市本嘉納）（鯛の絵あり）、「東岸田」（松の絵あり）、「正宗」功賞 名聲施四海 本家（「正宗」の字の中央に桜の絵あり）と記載がある。

*ほととぎす鳴きつる方かたをながむればただ有明の月ぞ残れる

八二、道因法師（四一丁裏）
旨味うまみあじ鮎あじの桜煮玉子焼折おひに詰つめるは涙なりけり

・弁当の弁松：文化七年（一一八〇）、越後出身の樋口与一が、日本橋の魚河岸商人たちのための、食事処を開いたのが始まりの弁当屋。三代目の樋口松次郎の時、弁当販売が主流となり、「弁当屋の松次郎」略して「弁松」と呼ばれるようになった。嘉永三年（一八五〇）、食事処を閉め、折詰料理専門店「弁松」を創業。魚河岸商人が使う鳶口の絵あり。魚印の商標の一部と、「魚がし安針町 御弁當 弁松製」と書かれた紙片が書き写されている。

*思ひわびさても命はあるものを憂うれきに堪へぬは涙なりけり

八三、皇太后宮太夫俊成（四二丁表）
世の中八道こそ開け川蒸汽波あまの上うへにも吟笛きてき鳴なり

・川蒸気：明治一八年（一八八五）、隅田川汽船株式会社によって、吾妻橋と永代橋の間に蒸気船が運航を始めた。船体が白色だったので白蒸気と、一区一銭という値段から一銭蒸気と、また、焼き玉エンジン特有のポンポンという音からポンポン蒸気ともいわれ庶民に親しまれた。三三年（一九〇〇）には千住吾妻汽船株式會社が設立され、船体を青色に塗った青蒸気といわれた蒸気船が、吾妻橋と千住の間を往復した。「此切符本日

限り千住吾妻瀛船株式會社」「自吾妻橋至小松島金參錢通行稅壹錢」と書かれた、川蒸氣の乗船切符の表、裏が書き写されている。

*世の中よ道こそなけれ思ひ入る山の奥にも鹿ぞ鳴くなる

八四、〔藤原清輔朝臣〕(四二丁裏、歌人の記載なし、本

歌との比較などから、歌人は清輔朝臣か)

味^{あじ}えば未だ此頃や稲荷寿しうれる見せなら今も大はし

・稲荷寿司の千住大橋壽々木や：稲荷寿司は、油揚げの袋を裂き、具の入った酢飯を入れ干瓢で巻いたもので、信田寿司、狐寿司とも呼ばれた。天保年間(一八三〇―四四)に売り出され、安価な庶民の食べ物として、屋台や棒振りで売られ普及した。店売りとしては日本橋十軒店や浅草第六天などが知られたが、明治後期には千住大橋の壽々木やが評判であった。「元祖」千住大橋南際稲荷壽司壽々木や富五郎」と書かれた紙片が書き写されている。

*長らへばまたこのごろやしのばれむ憂しと見し世ぞ今は恋しき

八五、俊恵法師(四三丁表)

夜^よもすがら物^{もの}云ふ花のイミ^{たづ}て聞^きにいぎのふ連^{つれ}を待けり

・白首：白首とは、白粉を首すじに濃く塗りたてた私娼のことで、白鬼とも呼ばれた。「東京何れの地に行も夜

間白首の悪鬼出没して衆人をなやます是当地名物の一品に加ふ」と記載あり。

*夜もすがら物思ふころは明けやらで聞のひまさへつれなかりけり

八六、西行法師(四三丁裏)

ながさかの更科蕎麦^{さらしなそば}ハ手打にて山葵^{わさび}かほればめに涙かな

・永坂更科の蕎麦：寛政年間(一七八九―一八〇一)に、信州更級出身の布屋太兵衛が、麻布永坂に「信州更科蕎麦処布屋太兵衛」の看板を掲げたのが始まり。將軍家の「御前そば」になったことで、その名が広まった。「品目 御膳さらしなそば 麻布区永坂町拾三番地 更科本店 布屋 堀井松之助 電話新橋千四百四十番」と書かれた折り紙が書き写されている。

*嘆けとて月やは物を思はするかこち顔なるわが涙かな

八七、寂蓮法師(四四丁表)

朝兒の露もまだひぬ入谷町見る人通^{かよ}ふ秋の賑ひ

・入谷の朝顔市：嘉永から安政期(一八四八―六〇)にかけて大ブームとなった朝顔は、明治に入るといったんは衰えたが、明治一五年(一八八二)頃から大正初めにかけて、入谷田圃といわれた一帯に住んでいた植木屋によってひろく栽培されるようになった。坂本村入谷

といわれた一带には、丸新、松本、高野、植松、入又、入十、入久、新亀などの植木屋が軒を並べ、大輪のものや変り種を栽培し人気を集めた。全盛期の二四年から二五年（一八九一—九二）頃には、早朝から往来止めとなるほどの賑わいを見せていた。三〇年代（一八九七—一九〇六）には、団子坂の菊人形をまねて、朝顔人形が登場したが、通俗的で悪評だった。「入谷ミヤげ」「植」と書かれた紙片には、ひざまずいて鉢入りの朝顔をみる、着物姿の若い女性が描かれている。「入谷の朝兒ハ昔も今も有名なる観物なりしが近頃ハ俗極る人形を造り観覧に興を添るに至りしかハ益々盛りに繁盛す」と記載あり。

*村雨の露もまだ干ぬまきの葉に霧立ちのぼる秋の夕暮

八八、皇嘉門院別当（四四丁裏）

並ぶ繪の數種のはがきハ上方や美を尽してや紙をらむべき
・繪葉書の上方面：繪葉書の流行の最盛期は、明治三七年から三九年（一九〇四—〇六）頃で、三七年には日本繪葉書会が結成され、その機関紙として博文館から『はがき文学』が創刊された。繪葉書マニアにより同好会、交換会、展覧会などが頻繁に開かれたが、最も売れたのは、コロタイプ版の美人繪葉書。銀座尾張町の上方屋（店主、平井録太郎）は、美人モデルを雇って

撮影したものを売るなど、各種の繪葉書を出して巨万の富を築いた。上方屋から売り出された繪葉書が書き写されている。
*難波江の葦のかりねのひとよゆゑみをつくしてや恋ひわたるべき

八九、式子内親王（四五丁表）

玉と美の貴き寶並ぶるハ不忍池の畔とも知る

・金銀盃類、袋物の玉寶堂：玉寶堂（店主、飯塚伊兵衛）は安永七年（一七七八）、上野山下にて創業の袋物の老舗。明治二六年（一八九三）、池之端仲町に移転。二九年（一八九六）、宮内省御用達を命ぜられた。袋物のほか、諸種の美術品を製作し、その品質の高尚、優雅さをもつて知られ、上流社会に顧客が多かった。「金銀盃類」（花模様のおの盃の絵あり）、「東京下谷池ノ端仲町宮内省御用達玉寶堂電話特、下谷九六五番一二四四番」と記載のある、折り曲げられた紙片が書き写されている。

*玉の緒よ絶えなば絶えね長らへば忍ぶることの弱りもぞする

九〇、段富門院大輔（四五丁裏）

みせばやな竺意匠染浴衣ぬれにし俣の色はかわらじ
・呉服、染物の金家竺仙：金家竺仙は、嘉永六年（一八五

三) 創業の風流古雅にして渋味ある、斬新奇抜な意匠で知られた染物屋。小紋の浴衣が大人気であった。「ちんちくりんの仙之助」といわれた創業者の橋本仙之助は、その綽名を縮めて竺仙を店名とした粋人で、大久保紫香(蔵書家、質屋 一八六三―一九二六)、永井素岳(書家、劇評家 一八五二―一九一五)、幸堂得知(文学者、劇評家 一八四三―一九二三)ら通人たちと親交があった。仙之助の次男、英二郎は、父から独立し支店を任され、熟練した妙技をもって染物の新意匠を案出、人気を博し、日本図案会の評議員を勤めた。小紋の描かれた反物の絵あり。「金家竺仙ハ中形染物を以て有名なり花柳に及び藝人社会に最も歓迎され竺仙染といふて東京名物の一品也」と記載あり。「呉服太物商 各色友禅染 東京市淺草區北富阪町十九番地 金家端竺仙分店」(橋本英二郎)と書かれた紙片が書き写されている。

*見せばやな雄島の海人の袖だにも濡れにぞ濡れし色は変らず

九一、後京極摂政前太政大臣(四六丁表)

錐くす名古屋此家の打もの八品もかたく光りかもねん
・金物(刃物、打物)のなごや：創業は元禄二年(二六八九)。明治期には日本橋区照降町と淺草区馬道町に店を構え、外国から輸入されたバリカンをまねた「錐印」を作り、「動く刃物」と呼ばれ評判となった。錐や銚な

どの絵あり。「東京市日本橋區小網町壹丁目三番地字てりふり町會なごや商店 電話浪花八百五十七番」と書かれた紙片が書き写されている。

*きりぎりす鳴くや霜夜のさむしろに衣片敷きひとりかも寝む

九二、二條院讚岐(四六丁裏)

わざおきの手振に見へて女郎花の人こそ知りし岩井久米八

・歌舞伎の女役者、岩井久米八：岩井久米八(一八四六―一九二三)は、岩井半四郎(八世、一八二九―一八八二)の門下であったが、後に市川團十郎(九世、一八三八―一九〇三)の門下に加えられ、市川久米八(後、久女八と改名)を名のつた。女団洲と呼ばれるほど実力があり、明治二〇年代から三〇年代(一八八七―一九〇六)にかけて神田の三崎座を拠点として、松本錦絲や岩井米花(一八四五―一九八)らとともに女芝居の全盛期を築いた。「岩井久米八ハ女優老練家を以て東京名物の一人と衆人これを許す」と記載あり。

*わが袖は潮干に見えぬ沖の石の人こそ知らね乾く間もなし

九三、鎌倉右大臣(四七丁表)

世の中を常に吞ミ居る貞奴彼の川上ガ妻で風呂敷
・新派女優の川上貞奴：川上貞奴(一八七一―一九四六)は、日本橋葭町の芸者であったが、明治二七年(一八

九四)、壮士芝居の川上音二郎(二八六四—一九一一)と結婚し女優業に転身。三〇年代(二八九七—一九〇六)には、川上一座の欧米巡業により、花形女優として評判になった。「御髪あらひに就て御婦人方に告げる目下歐米漫遊中新派女俳優川上貞奴述日本でも西洋でも御婦人方の美容いのは御髪の艶の良く丈の長いのが第一かと存じます此良い髪を持ち又活潑な精神を持ちますには御髪を洗ふ事に御注意が肝要かと思ひます之れを怠りますと毛穴が塵垢の為に塞がれ終に氣鬱、ヒステリー、…起します私は先年歐…良く氣…」と記された紙片が書き写されている。

*世の中は常にもがもな渚漕ぐ海人の小舟の綱手かなしも

九四、参議雅経(四七丁裏)
御社の神の御前に尊くぞ唐銅高く鳥居立なり

・靖国神社の大鳥居…靖国神社は、明治二年(一八六九)の創建で、当初は東京招魂社と称したが、一二年(一八七九)、靖国神社と改称し、別格官幣社に列せられた。「靖国鳥居」と称される大鳥居は、当時から東京の觀光名所の一つとして親しまれてきた。現在の大鳥居は昭和四九年(一九七四)の再建。「九段坂上靖国神社の銅の大鳥居ハ東京第一の大物にして明治唯一の名物なり」と記載あり。背景に大鳥居が描かれ、表に「明

治三十八年五月三日四日五日靖国神社臨時大祭参拜券」と、裏に「一、本券携帯ノ向ハ五月三日、四日、五日午後三時ヨリ四時迄ノ間ニ於テ靖国神社舊競馬場西端受附ニ至リ掛リ員ノ誘導ニ依テ参拜ノコト一、参拜終レハ神酒ヲ供ス 三、本券携帯者ハ余興中相撲及ヒ能樂所ヘハ隨意出入シ得 四、本券ハ一枚一人ニ限ル」と記載のある参拝券が書き写されている。

(口絵一五、参照)

*み吉野の山の秋風さ夜更けて古里寒く衣打つなり

九五、前大僧正慈圓(四八丁表)

儲づく浮世繪高く賣る也丹繪うるし絵墨摺乃筆

・江戸絵の売買…江戸で版行された浮世絵版画全般のことを江戸絵といい、東錦絵と同義で用いる。江戸絵とは元来、江戸みやげとして浮世絵を地方に持ち帰った人々が使ったことばであった。墨摺絵、丹絵、漆絵、団扇絵などの古い江戸絵は、高価な値段で売買された。浮世絵の収集で知られた画商小林文七(一八六一—一九三三)は、明治三一年(一八九八)、自ら所蔵する浮世絵の展览会を上野の伊香保楼で開催したが、その目録(日英両文)については、文七と親交があったアメリカの日本美術研究家フェノロサ(一八五三—一九〇八)が担当した。おいらんの正面(「春信画」と後ろ

姿（「おいらん春英画」）が描かれた円形の团扇絵が描き写されている。「近年江戸繪と称する古繪非常なる聲價を博し一葉の錦繪に数十圓を投し是を得る就中此賣買者之内小林文七等を以て最も盛りなりとす」と記載あり。（口絵一六、参照）

*おほげなく憂き世の民におほふかなわが立つ袖に墨染の袖

九六、入道前大政大臣（四八丁裏）

皆みなきそふはなしの庭にへの寄よせならでこ子等らすくものハ御おとぎ伽まなりけり

・お伽ま断つの会：明治三三年（一九〇〇）前後に、児童を対象にした口演くげん童話どうわが始はじまった。三九年（一九〇六）、口演くげん童話どうわ家の巖谷小波（一八七〇—一九三三）や久留島武彦（一八七四—一九六〇）らによりお伽ま俱樂部くらくぶが創設され、お伽ま芝居しばい、音楽会、お伽ま講演会、お伽ま断つの会が催された。七つの小さな円の中に、お伽ま断つに登場する猿、蟹、兎、犬、鶏、白などが描かれている。「招待券十五日午後一時半より神田美土代町青年會館にて第五回お伽まばなしの會お伽ま話、狂言、蓄音器、唱歌等」と書かれた招待券が書き写されている。

*花誘う風の庭の雪ならでふりゆくものはわが身なりけり

九七、権中納言定家（四九丁表）

買かうふ人を待まちほど賣うる塩しほせんべい焼やや醬油しょうゆにミをこがしつ、

・鈴木屋の塩せんべい：塩せんべいは元來、農家の間食用の菓子で、くず米などの粉をこねて薄く伸ばして乾かし、塩味を付けて焼いたものだった。やがて醬油をつけて焼くようになり、庶民の菓子として普及していった。埼玉県草加の名物、草加せんべいがその代表である。明治から大正にかけて、東京の池之端では、鈴木屋の役者紋を焼き付けた、厚焼きの塩せんべいが評判だった。塩せんべいの絵あり。橘紋と片喰紋が描かれた紙片には、「名代無類あつやき役者紋狀塩せんべい池之端七軒町七番地 鈴木屋礼次郎」と記載あり。

*来ぬ人をまつほの浦の夕風ゆふかぜに焼くや藻塩もしほの身も焦がれつつ

九八、正三位家隆（四九丁裏）

風かぜをよく両國川乃夕涼ミ花火ぞ夏のしるしなりける

・両國の夏の納涼花火：隅田川の夏の風物詩として知られる隅田川花火大会の歴史は、享保一八年（一七三三）五月二八日の両國川開きにまで遡る。大飢饉や疫病による死者供養と災厄除去を祈願して、花火師、六代目鍵屋弥兵衛が、花火を打ち上げたのが始まりだった。明治期には一代目鍵屋弥兵衛が、外国から輸入された新しい薬剤を使って赤、青などの発色花火の打ち上げに成功し、また、マニラから持ち帰ったスターマインを、初めて両國川開きで打ち上げた。明治三〇年

(二八九七) 八月には、見物客の重みで木橋の両国橋の欄干が落ち、多くの死傷者が出る大惨事が起きた。この事故を契機に両国橋は旧橋より上流に鉄橋で架けられた。打ち上げ花火、冠菊(しだれ柳)と両国橋(鉄橋)の絵あり。「昔両国の川開きハ五月廿八日に限りたるも今ハ一定の日ハなし花火を打上る前警察署の認可を得て後に執行と虽とも此納涼今に至るも東京名物の一なりと定む」と記載あり。五〇丁表に「江戸一流[㊦]元祖南京龍田[㊧]□□ち男山[㊨]□□むさしの□□安部野らんきく宮城野乃萩横山町壺丁目 花火せん香かきや弥兵衛」と記載がある花火師、鍵屋弥兵衛の広告あり。

*風そよぐ檣たかねの小川の夕暮は襖あはせぞ夏のしるしなりける

九九、後鳥羽院(五一丁表、なお、「五〇丁裏」は白紙)人も知り人も羨うらやまむ美術館世に大倉乃物好む身ハ

・大倉邸の美術館：明治を代表する実業家の一人、大倉喜八郎(一八三七―一九二八)号は鶴彦、家紋は五階菱)は、産業の振興、貿易の発展に尽力した一方で、育英、慈善事業、文化財の保護などにも功績を残した。喜八郎は、五〇余年に渡って多数の貴重な文化財を蒐集し、当初それらを私邸で知人たちに公開していた。当時の様子は、『風俗画報』(一九〇三年七月一〇日号)

に掲載された、「大倉邸美術館内の圖」(山本松谷画)などによって知ることができる。大正六年(一九一七)には、私邸の敷地の一角に日本で最初の私立美術館、財団法人大倉集古館を開館させた。鶴と菱形紋が描かれている。

*人もをし人も恨めしあぢきなく世を思ふゆゑに物思ふ身は

一〇〇、順徳院(五一丁裏)物識ものびや古ふるき史し学がくを調しらぶは猶なほ譽ほまれある博士はかせなりけり

・人類学者、考古学者の坪井正五郎：坪井正五郎(一八六三―一九一三)は東京帝国大学理科大学教授で、人類学教室を主宰。民俗学、考古学までを含むイギリス流の幅広い人類学を提唱し、草創期考古学の指導者として活躍。日本石器時代人について、コロポックル説を唱えた。趣味人としても知られ、玩具の研究、蒐集に関心を持ち、清水晴風(二八五―一九一三)、巖谷小波(二八七〇―一九三三)ら玩具愛好家たちと交遊し大供会に参加。玩具を中心とする児童文化運動を推進した。狂歌や戯文などにも長じ、「遺跡にてよき物獲んとあせるとき心は石器胸は土器土器」などの句を残した。土偶や石器の絵あり。「坪井正五郎本郷駒込西片町十番地ほ十三號」と書かれた名刺が書き写されている。

*ももしきや古ふるき軒端のきばの忍しのぶにもなほ余りある昔なりけり

〔事項索引、人名索引〕

・各索引の排列は五十音順。

・事項および人名の後に記した数字は歌番号。
・本文中、網かけをした百名物については、歌番号を太字で示した。

〔事項索引〕

あ

- ・赤坂の春本、林家（赤坂芸妓の置屋）…一五
 - ・秋の七草（向島百花園）…三七
 - ・赤穂義士（浪花節、泉岳寺）…二五、三四
 - ・浅草十二階（凌雲閣）…五
 - ・浅草田甫 草津亭（温泉割烹）…二七
 - ・愛宕山の愛宕塔…七〇
 - ・穴守稲荷…六〇
 - ・甘名納糖（榮太樓總本舗）…二六
 - ・鉛細工（小松齋一流）…二〇
 - ・荒川堤の桜（五色桜）…七三
 - ・栗餅の澤屋…七八
- い
- ・池上競馬場…五二
 - ・一銭蒸気（川蒸気、ボンボン蒸気）…八三
 - ・井筒香油…五〇

- ・稲荷寿司（千住大橋壽々木や）…八四
 - ・今金（しゃも鍋、鳥料理）…二一
 - ・芋坂の焼団子（羽二重団子）…六八
 - ・入谷の朝顔市…八七
- うゝえ

- ・上野の山の桜…六六
- ・魚市場（日本橋）…六四
- ・鰻の神田川…七九
- ・鰻の竹葉亭…六五
- ・梅ぼ志飴（榮太樓總本舗）…二六
- ・榮太樓總本舗（菓子屋）…二六
- ・江戸絵の売買…九五
- ・『江戸名所図会』（新川の酒問屋）…八一
- ・絵葉書の上方屋…八八
- ・縁日…三六

お

- ・大倉邸の美術館（大倉集古館の前身）…九九
- ・大供会（人形、玩具の研究会）…一〇〇
- ・大鳥居（靖国神社）…九四
- ・小川一写真真店（小川写真製版所）…一二
- ・小川潮華園（カスガオイル、化粧小間物店）…七
- ・お茶の水橋…六
- ・お茶の山本山（山本嘉兵衛）…八

- ・お伽噺の会（お伽俱樂部）：九六
- ・女役者（岩井久米八）：九二

か

- ・凱旋記念五二共進會出品紀念繪葉書：四七
 - ・鏡餅と火打石（水天宮の縁日）：五八
 - ・カスガオイル（煉香油）：七七
 - ・鯉節のにんべん：七七
 - ・角筈十二社（熊野神社）：五五
 - ・金物のなごや商店：九一
 - ・金家竺仙（呉服、染物）：九〇
 - ・歌舞伎座：四一
 - ・上方屋（繪葉書の販売）：八八
 - ・亀戸の梅屋敷（臥竜梅）：三七
 - ・亀戸神社の藤と葛餅：五一
 - ・川蒸気（一銭蒸気、ボンボン蒸気）：八三
 - ・神田市場（神田青物市場、神田多町市場）：一七
 - ・神田川（鰻屋）：七九
 - ・神田柳原の古着市場：五七
- きくけ
- ・菊人形（団子坂）：二九
 - ・奇術師（松旭齋天一）：四四
 - ・絹ごし豆腐（豆腐料理の笹乃雪）：三一
 - ・玉寶堂（金銀盃類、袋物）：八九

こ

- ・金清楼（割烹店）：二一
- ・草津亭（温泉割烹）：二七
- ・葛餅（亀戸神社、船橋屋）：五一
- ・興行師（野呂藤助）：四六
- ・紅葉館（料亭）：三二
- ・胡蝶園（御園白粉）：九
- ・五二館（五二会館）：四七
- ・古梅園（製墨）：五四
- ・米相場：七四

さ

- ・西郷隆盛像：六六
- ・笹乃雪（豆腐料理）：三一
- ・猿屋の楊枝：六七
- ・澤屋の栗餅：七八
- ・三銀陶器店：三〇

し

- ・塩せんべい（鈴木屋礼次郎）：九七
- ・『時好』（三越呉服店広報誌）：一
- ・不忍池の蓮：五九
- ・芝神明の太々餅：四三
- ・しゃも屋（今金）：二一
- ・集古會：四〇

- ・生姜(芝神明) ……四三
 - ・『少年世界』(博文館) ……二四
 - ・消防組の出初式 ……四八
 - ・白木屋呉服店 ……二
 - ・白首(私娼) ……八五
 - ・新川の酒問屋 ……八一
 - ・神宮奉齋会本院(日比谷大神宮) ……四二
 - ・しんこ細工(梶鋏太郎) ……一九
 - ・新派女優(川上貞奴) ……九三
 - ・人類学者、考古学者(坪井正五郎) ……一〇〇
- すゝそ
- ・水天宮 ……三六、五八
 - ・雀焼き(鮒儀) ……五六
 - ・隅田川汽船株式会社 ……八三
 - ・製墨の古梅園 ……五四
 - ・泉岳寺義士遺物陳列場 ……三四
 - ・千住吾妻瀛船株式会社 ……八三
 - ・浅草寺の六地藏石灯籠 ……三九
 - ・蕎麦(永坂更科) ……八六
- たゝつ
- ・大金(鳥料理) ……六二
 - ・太々餅(芝神明) ……四三
 - ・『太陽』(博文館) ……二四

- ・团子坂の菊人形 ……二九
 - ・千木筥(芝神明) ……四三
 - ・竺仙(呉服、染物) ……九〇
 - ・竹葉亭(鰻屋) ……六五
 - ・茶の湯、茶器 ……二三
 - ・佃煮、紫蘇卷(濱金) ……六九
- てゝと
- ・出初式(消防組) ……四八
 - ・天賞堂(高級貴金属店) ……七二
 - ・天ぶらの天金 ……三八
 - ・陶器店の三銀 ……三〇
 - ・東京競馬会 ……五二
 - ・東京招魂社(靖国神社の旧称) ……九四
 - ・東京築地活版製造所 ……一三
 - ・東京帝室博物館 ……六一
 - ・東京電車鍍道株式会社 ……三
 - ・東京電燈會社 ……四九
 - ・東京米穀取引所 ……七四
 - ・豆腐料理の笹乃雪 ……三一
 - ・常磐津節(初世常磐津林中) ……一六
 - ・鳥料理の大金 ……六二
- なゝの
- ・永坂更科の蕎麦 ……八六

- ・なごや(金物、刃物、打物) ……九一
 - ・浪花節(浪曲、桃中軒雲右衛門) ……二五
 - ・二七不動(縁日) ……三六
 - ・日本電燈會社 ……四九
 - ・日本橋の魚市場(魚河岸) ……六四
 - ・日本美術協會 ……一一
 - ・にんべんの鯉節 ……七七
 - ・能楽師(五二世梅若六郎、觀世流シテ方) ……七六
- はくひ
- ・『はがき文学』(日本繪葉書會の機関紙) ……八八
 - ・博文館 ……二四、八八
 - ・白牡丹(和装小間物) ……三五
 - ・花火(両国、夏の隅田川、納涼花火) ……九八
 - ・花屋敷(向島百花園) ……三七
 - ・羽二重団子(芋坂の焼団子) ……六八
 - ・濱金(佃煮、紫蘇卷) ……六九
 - ・春本、林家(赤坂芸妓の置屋) ……一五
 - ・日比谷大神宮での結婚式 ……四二
 - ・廣目屋(宣伝広告屋) ……一四
- ふくほ
- ・『風俗画報』(「大倉邸美術館内の圖」) ……九九
 - ・深川の倉庫(蔵) ……二二
 - ・藤村(羊羹) ……四五

- ・鮎儀の雀焼き ……五六
 - ・船橋屋の葛餅(亀戸神社) ……五一
 - ・古着市場(神田柳原、神田岩本町、芝日陰町) ……七七
 - ・『文藝俱樂部』(博文館) ……二四
 - ・弁当の弁松(折詰料理専門店) ……八二
 - ・宝丹(胃薬、守田治兵衛商店) ……三三
 - ・本所四ツ目の牡丹 ……八〇
 - ・ポンポン蒸気(川蒸気、一錢蒸気) ……八三
- まぐも
- ・丸見屋(化粧品販売) ……四、九
 - ・萬世橋(めがね橋) ……七一
 - ・三崎座(女芝居) ……九二
 - ・不見転(転芸者) ……五三
 - ・御園白粉(無鉛白粉) ……九
 - ・三越呉服店(呉服店越後屋) ……一
 - ・ミツワ石鹼 ……四
 - ・向島百花園(花屋敷) ……三七
 - ・『名所江戸百景』(亀戸天神、角筈十二社) ……五一、五五
 - ・守田治兵衛商店(薬舗、胃薬「宝丹」) ……三三
- やぐよ
- ・八百善(会席料理) ……六三
 - ・靖国神社の大鳥居 ……九四
 - ・山の手の芸妓(俗称、水天) ……二八

- ・羊羹の藤村：四五
- ・楊枝の猿屋：六七
- ・与兵衛寿司（江戸前握り寿司）：七五

らゝろ

- ・龍池会（日本美術協会の前身）：一一
- ・凌雲閣（浅草十二階）：五
- ・浪曲（浪花節、桃中軒雲右衛門）：二五
- ・六阿弥陀参り：一〇
- ・六地藏石灯籠（浅草寺）：三九

〈人名索引〉

あゝい

- ・秋田柳吉（廣目屋）：一四
- ・有馬頼徳（久留米藩主、水天宮の勧請）：五八
- ・安藤広重（『名所江戸百景』）：五一、五五
- ・飯塚伊兵衛（金銀盃類、袋物の玉寶堂）：八九
- ・池田鐵三郎（天ぷらの天金）：三八
- ・市川団十郎（九世、歌舞伎役者）：四一、九二
- ・井上馨（政治家、茶の湯、茶器の流行）：二三
- ・岩井久米八（歌舞伎の女役者）：九二
- ・岩井半四郎（八世、歌舞伎役者）：九二
- ・岩井米花（歌舞伎の女役者）：九二
- ・巖谷小波（お伽噺の会）：九六、一〇〇

うゝお

- ・梅若六郎（五二世、観世流シテ方の能楽師）：七六
 - ・江澤金五郎（高級貴金屬の天賞堂）：七二
 - ・大久保紫香（蔵書家、質屋）：九〇
 - ・大倉喜八郎（実業家、美術品蒐集家）：四九、九九
 - ・大田南畝（幕臣、戯作者、向島百花園）：三七
 - ・大西榮輔（和装小間物の白牡丹）：三五
 - ・大橋佐平、新太郎（博文館）：二四
 - ・大村彦太郎（白木屋呉服店）：二二
 - ・小川一真（小川写真製版所）：二二
 - ・尾上菊五郎（五世、歌舞伎役者）：四一
- かゝき
- ・鍵屋弥兵衛（花火師）：九八
 - ・梶鍛太郎（しんこ細工）：一九
 - ・鹿島清兵衛（新川の酒問屋）：八一
 - ・加藤銀次郎（三銀陶器店）：三〇
 - ・加藤千蔭（国学者、向島百花園）：三七
 - ・仮名垣魯文（戯作者、廣目屋の命名）：一四
 - ・加納久宜（子爵、東京競馬会）：五二
 - ・川上音二郎（新派男優、興行師）：九三
 - ・川上貞奴（新派女優）：九三
 - ・神田茂七（鰻の神田川）：七九
 - ・菊池治良兵衛（日本電燈會社）：四九

く

- ・久留島武彦（お伽噺の会）…九六
 - ・栗山善四郎（江戸会席料理の八百善）…六三
 - ・小泉与兵衛（江戸前握り寿司）…七五
 - ・幸堂得知（文学者、劇評家）…九〇
 - ・後藤貞行（彫刻家）…六六
 - ・小林文七（画商、浮世絵の収集家）…九五
 - ・小松斎一流（鉛細工）…二〇
- さ
- ・西郷隆盛（西郷隆盛像）…六六
 - ・斎藤長秋（『江戸名所図会』）…八一
 - ・桜間伴馬（金春流能楽師）…七六
 - ・佐原鞠場（骨董商の北野屋平兵衛）…三七
 - ・さるや七郎兵衛（楊枝の猿屋）…六七
 - ・沢野庄五郎（羽二重団子）…六八
 - ・清水晴風（玩具研究家）…四〇、一〇〇
 - ・松旭斎天一、天勝（奇術師）…四四
 - ・ジヨネス（アメリカ人奇術師）…四四
 - ・壽々木や富五郎（千住大橋の稲荷寿司屋）…八四
 - ・鈴木屋礼次郎（厚焼き役者紋形塩せんべい）…九七
 - ・芹川ふみ（製墨の古梅園）…五四
- た
- ・高津伊兵衛（鱈節のにんべん）…七七

か

- ・高村光雲（西郷隆盛像）…六六
 - ・玉屋忠兵衛（豆腐料理の笹乃雪）…三一
 - ・千葉勝五郎（歌舞伎座の座元）…四一
 - ・坪井正五郎（人類学者、考古学者）…四〇、一〇〇
 - ・天海僧正（不忍池、上野の山の桜）…五九、六六
 - ・桃中軒雲右衛門（浪花節、浪曲）…二五
- な
- ・永井素岳（書家、劇評家）…九〇
 - ・成屋文蔵（成文の牡丹園、四ツ目の牡丹）…八〇
 - ・ニコライ（ロシアの皇太子）…六三
 - ・布屋太兵衛（永坂更科の蕎麦）…八六
 - ・野呂藤助（興行師）…四六
- は
- ・橋本雅邦（日本画家）…一八
 - ・橋本仙之助、英二郎（呉服、染物の笠仙）…九〇
 - ・長谷川清吉（割烹店、金清楼）…二一
 - ・長谷川雪旦（『江戸名所図会』）…八一
 - ・長谷川てる（しゃも屋、今金）…二一
 - ・林若吉（集古會）…四〇
 - ・原龍太（お茶の水橋の設計者）…六
 - ・樋口与一、松次郎（弁当の弁松）…八二
 - ・平井録太郎（絵葉書の上方面）…八八
 - ・平野富二（東京築地活版製造所）…一三

ふくほ

- ・フエノロサ（日本美術研究家）…九五
- ・福島福太郎（鳥料理の大金）…六二
- ・福地源一郎（歌舞伎座）…四一
- ・藤村忠次郎（藤村の羊羹）…四五
- ・別府金七（鰻の竹葉亭）…六五
- ・宝生九郎（一六世、宝生流能楽師）…七六
- ・細田安兵衛（榮太樓總本舗）…二六
- ・ボードイン（オランダの陸軍軍医）…三三
- ・堀井松之助（永坂更科の蕎麦）…八六

まぐも

- ・益田孝（実業家、茶の湯、茶器の流行）…二三
- ・松田幸二郎（和装小間物の白牡丹）…三五
- ・松本錦絲（歌舞伎の女役者）…九二
- ・萬龍（赤坂春本の芸妓）…一五
- ・三河屋茂兵衛（鰻の神田川）…七九
- ・三井高利（呉服店越後屋）…一
- ・三輪善兵衛（ミツワ石鹼）…四
- ・本木昌造（東京築地活版製造所）…一三
- ・守田治兵衛（葉舗、胃薬「宝丹」）…三三

やくよ

- ・矢嶋作郎（東京電燈會社）…四九
- ・安田伊佐衛門（陸軍中尉、東京競馬會）…五二

- ・山中共古（集古會）…四〇
- ・山本嘉兵衛（お茶の山本山）…八

（かわもと つとむ 主題情報部人文課）